

申請者	学科名	造形デザイン学科	職名	准教授	氏名	南川 茂樹	印
調査研究課題	間伐材の需要を促すため、素材を生かし身体感覚に訴える造形デザインの研究						
交付決定額	300,000円						
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担		
	代表	南川茂樹	デザイン学部・准教授	造形デザイン 遊具デザイン	素材研究・構造研究・ デザイン全般		
	分担者						
調査研究実績の概要	<p>針葉樹を有効に活用することで、森林の回復に貢献できるよう、2007年より針葉樹を用いた家具や空間表現を提案してきた。家具では、針葉樹の強度不足による欠点を構造で補うデザインで克服し、新たなデザイン提案ができた。空間表現では、針葉樹の持つしなやかさを生かし、板を湾曲させてダイナミックな造形表現で効果を得た。また2010年では、針葉樹の通直な木理を活かして、その木目を枝振りで見立てたツリー形のプロダクトを提案し、2011年の提案は、2008年に発表したWAFFLE STOOLの展開であるTriStoolでスツールの完成形を得、2012年度の提案は、カフェ空間をすべてプロデュースするというものだった。そして、2013年度は、間伐材の歩留まりがよい寸法の板で構成する現代の室内空間を提案した。</p> <p>そして、今年度の提案は、プロダクト提案に留まらず、間伐材のひとつであるヒノキ・スギの素材そのものに着目し、肌理・香りなど身体感覚に訴えかける要素をテーマにデザイン研究し、ヒノキ・スギの良さ、魅力を再確認してもらうことによって、間伐材の可能性を広げることを目的とした。</p> <p>岡山の美術 特別企画展「目の目 手の目 心の目 体感の向こうに広がる世界」展の出品に向けて、この展覧会のテーマである以下の内容を中心にデザイン提案をした。</p> <p>“さまざまな素材によって多彩に表現される造形の魅力に、五感を通して出会う展覧会です。鑑賞者が作品を楽しみながら“心の目”を開くことで、作品の向こうに広がる作者の想いを感じとり、さらには自分なりの意味をつむぎだしていく... そんな素敵な機会になることを願っています。”</p> <p>出品作家8名は、テキスタイル、石、金属、等々、それぞれの素材を用いた作品を展示した。そういった状況の中、私は、それらの作品をつなぐべく、それぞれの作品をゆっくり鑑賞できるように椅子の形状をした移動可能な鑑賞装置を制作した。</p> <p>今回使用した材も、岡山県西粟倉村の株式会社 西粟倉・森の学校の協力を得て、すべてそこから調達したヒノキの間伐材である。間伐材の欠点である、節があるや、大断面材が取れないといったことを、デザインで克服をし、ゆったりと作品を鑑賞できるよ次頁に続く方向に覆いのある椅子状の装置を提案。間伐材でも容易に提供できる幅100mmをモジュールとし、節があっても強度に影響がない積層という構造にし、それぞれの欠点を克服している。使用に影響がない部分に節を配し、アクセントとしても、あるいは間伐材である証拠としての表現も担っている。</p> <p>この鑑賞装置は3タイプあり、それぞれ対象によって、“couple ver.”、“others ver.”、“single ver.”とした。前者2つは、二人が座ることができ、カップル用、他人用とした。そしてひとりで座る個人用も制作。底面には、キャスターが取り付けられていて、会場内を自由に移動できる。</p> <p>鑑賞者は、鑑賞したい作品の前までこの装置を押して移動させ、靴を脱いで直接ヒノキの肌理を肌で感じ、覆いある場所に座ることによって、ヒノキの芳香を感じながら心地よ</p>						

く作品を鑑賞できる。今回の展覧会のテーマである五感を通して作品に向き合うのに最適な、触覚、嗅覚に訴えた作品になっている。覆いは他の視線から逃れることになり、鑑賞に集中できることに一役買っている。

間伐材でつくられていることを強調するのではなく、デザイン面で訴求し、ユーザーがその点を評価し求め、結果として間伐材利用に貢献していることになることが、この提案の狙いである。環境に関心のあるユーザーばかりでなく、一般の人にも広く普及し、間伐材である針葉樹の需要が拡大することが、森林の再生に一助になることを願う。

#### 出展

「目の目 手の目 心の目 体感の向こうに広がる世界」展

会期：2015年3月14日～4月19日

会場：岡山県立美術館



